

映画「家族の軌跡 3.11の記憶から」 上映&大西暢夫トーク

3月27日(日) 14時~16時(開場13時30分)
写真展会場にて(要申込 ☎0749-42-4114)

残された家族の思い、 その軌跡を見つめたルポルタージュ。

2011年3月11日に発生した東日本大震災以降、東北沿岸部を取材する日々が今も続いている。

僕らが生きている時代は、これで終わってしまうかもしれないとまで、現場は絶望感に包まれていたことを思い出す。命を亡くした2万人を思う日が続いた。現地で見た安置所のご遺体を今も思い出すことがある。「無念だったと思います」と言いながら自衛隊員が涙を拭う姿もあった。

自分に置き換えられない現実に取り添うことが、どれほど難しいことなのか、それを肌で感じてきた。相手の言葉を受け止めるだけが精一杯だった。どうしてもこの記憶や空気感を写真や映像にとどめておきたかった。僕はカメラマンという記録者だからだ。

ドキュメンタリー映画を作ろうと思ったのは、震災から2年ほど経っていたところだ。がれきの分別をするおばさんの言葉が一つのきっかけだった。その現場は、塵や埃が海風でつねに舞い上がっていた。目の前のがれきの山は、自宅かもしれない、いや、友だちの家の柱かもしれない。しかし今の生活を少しずつ立て直していくために、目の前の仕事を淡々とこなしている。

「ここを撮って!この現状を知って欲しい!」

背中を押されたように、僕はビデオカメラを回し始めた。そこには真剣な眼差しの中に、笑顔があった。

「でもね、生活用品が出てくるだけで、いろいろ考えてしまって、マスクの中は、涙でくもるときがあるのよ。でも続けるの、この仕事を!」

東北の人たちのひたむきな姿の中に、生きようとする根強さを教えられた。そして、言葉を聞かされる覚悟と、聞いた責任があると思うようになった。

「まあ、どうぞ」と通された仮設住宅の一室には、家族の遺影写真が目の中に飛び込み、空気が止まったような雰囲気にもまれた。そして全身に力が入った。

命日は揃って3月11日。これが東北沿岸部の現実だった。

街の復興が進み、明るい話題が多く飛び交うようになってから、人の表情も明るくなった。しかし、そればかりが東北の話題ではないことは、玄関の内側を見てわかっていた。外で明るく振舞い、内で静かに酒を飲む。みんなの心の内は一緒だった。

そこにピントを合わせたかった。玄関の内側は、心の内側と似ている。軌跡をたどるように残された家族は、今日も玄関の外へ元気良く出掛けていくのだった。



おおし のぶお
大西 暢夫

1968年生まれ。写真家・映画監督の本橋成一氏に師事。1998年からフリーのカメラマンとなる。25年間の東京での暮らしから、現在は生まれ育った岐阜県揖斐郡池田町に拠点を移す。『おばあちゃんは木になった』(ポプラ社、2002)で第8回日本絵本賞、『ぶた にく』(幻冬舎エデュケーション、2010)で第59回小学館児童出版文化賞、第58回

産経児童出版文化賞大賞、ドキュメンタリー映画「水になった村」で、第16回EARTH VISION地球環境映像祭最優秀賞を受賞。

著書に「僕の村の宝物」(情報センター出版局、1998)、『分校の子供たち』(カタログハウス、2000)、『ひとりひとりの人』(精神看護出版、2004)、『花はどこから』(福音館書店、2005)、『水になった村』(情報センター出版局、2007)、『徳山村に生きる』(農山漁村文化協会、2009)、『津波の夜に3・11の記憶』(小学館、2013)、『シイタケとともに』(農山漁村協会、2015)など。最新刊は「ここで土になる」(アリス館、2015)。

2011年の東日本大震災以降、東北沿岸部に支援物資を運びながら取材を継続、岐阜新聞で『東北沿岸600キロ 震災報告』(40回)、『3.11の証言 心に留める東日本大震災』(30回)を連載、16回の報告会を開催し、2016年映画「家族の軌跡 3.11の記憶から」を製作。

大西暢夫写真展

家族の軌跡 3.11の記憶から／ここで土になる

3月10日(木)~3月27日(日) 10時~18時 月・火曜日休館



「ここで土になる」(アリス館、2015)

ダム建設にゆれた小さな村の大イチョウと夫婦の物語

愛荘町立愛知川びんてまりの館・愛知川図書館

〒529-1313 滋賀県愛知郡愛荘町市1673

phone:0749-42-4114



交通のご案内

■お車で: 国道8号「愛知川」信号より東へ約5分

■電車で: JR能登川駅からバス「市ヶ原」行乗車、「愛知川」駅下車徒歩7分または、近江鉄道「愛知川駅」下車徒歩7分